

- 則的古墳」と認めたい。
- 40) 註17安藤論文。
- 41) 和田千吉「常陸国小田村古墳調査」『考古界』第6編第1号 明39
- 42) 大森信英『那珂湊市・平磯三ツ塚古墳群調査報告II』昭33

- 43) 杉山晋作他『研究紀要』4 昭54
- 44) 註17安藤論文。
- 45) 杉山晋作「変則的古墳の一解釈(その一) - 前方後円墳の平面企画方法を通して -」『古代』第57号 昭49
- 46) 註17安藤論文。

## 真行寺廃寺跡出土の文字瓦

今 泉 潔

千葉県文化財センターは、昭和56年12月に成東町真行寺廃寺跡の確認調査を実施し、その成果報告を昭和57年3月に刊行した(註1)。この調査ではぼう大な量の瓦が出土したため、報告書の執筆時点ではほとんど水洗いが済んでいない状態であった。その後数ヶ月を要してやっと水洗・注記を終了した。その結果軒瓦の追加こそなかったものの、3点の文字瓦が出土していたことがわかった。いずれ第2次調査(註2)の成果もあわせた本廃寺跡の正式報告が作成されることと思う。しかし、それまでこの貴重な資料をうもれたままにしておくのもどうかと思っていたところ、幸い調査担当の沼沢豊氏のおすすめもあったので、この機会に本誌上をお借りし、その3点の文字瓦を紹介しておきたい。

\*

文字瓦には、ヘラや指で書きしるしたもの、スタンプ状のもので押捺したものとがある。その内容は実に多岐にわたるが、郡・郷名、人名、寺院名がそのおもなものである。これまでそれらの記載内容を通して、瓦の貢納体系や造瓦組織を明

らかにするなどの、興味深い研究が続けられてきている。

○ 1は広端部と側面の残る平瓦片で、文字は凸面に端面と平行に中央から側縁へとヘラ書きしてある。1字目は「月」、2字目は一応文字らしい体裁を整えているが、解読できない(註3)。それから右端にほんのわずかだが、字の一部分らしいものがみえる。これらは文字の状態、そして筆勢や癖から一人の人間が同一の工具を使って書いたものと思われる。

凹面には斜めに糸切り痕が走り、布目も残る。またわずかに桶の桤板痕らしいものも観察できる。端面は2回のヘラケズリ、未調整のところもある。側面には平瓦円筒を分割したときの痕跡がそのまま残っている。これは平瓦円筒のときに、内側から素地の $\frac{2}{3}$ ほどのところまで鋭利な刃物で切り込みを入れる。そしてそれがある程度乾燥すると、切り込みを入れた部分から平瓦円筒を割っていく。その痕跡である。こうして普通は平瓦4枚を1つの平瓦円筒から作るのである。この未調整の分割痕は桶巻作りの有力な根拠となる。凸面は単にナ

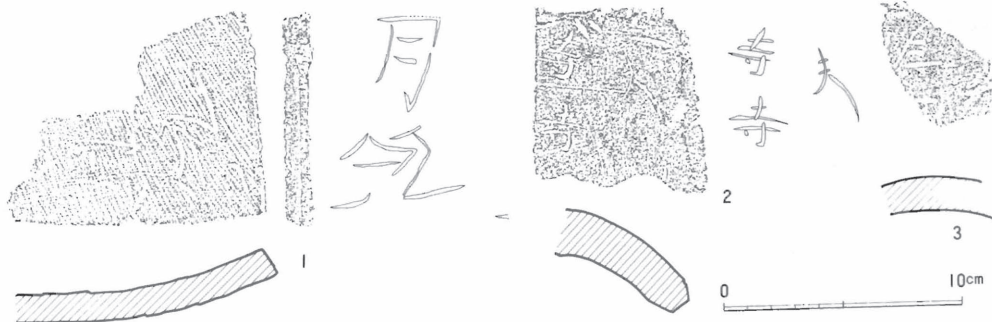


図1 真行寺廃寺跡出土の文字瓦(1/3)

デ調整で仕上げ、叩き板を使っていない公算が大きい。凸面の表面には本来胎土には含まれていない白色砂粒が多く、あるいは「離れ砂」的な効果をねらって塗布したのかもしれない。

○ 2は行基丸瓦の狭端部に3文字書いたものである。「寺」を上下に2文字、その右側に「大」もしくは「夫」とへら書きしてある。「寺」は同じ文字を2度繰り返し、しかも「土」の部分の筆順が間違っていて、習書の可能性が強い(註4)。習い覚えた文字を瓦工が見よう見まねで書きつけたのであろう。そのわりに筆勢は比較的しっかりしている。凸面はロクロ調整で、側面を3回へらケズリし、凹面には粗い布目が残る。

○ 3は丸瓦の端部に「三田」とへら書きしたものである。「三田」の下にさらに文字が続いていれば、人名の可能性はある。へらの運び方は明朝体活字のように厳密に線を使い分けていないが、器用に工具の両面を使って、太い線と細い線とを書きあらわしている。成形・調整技法は2の丸瓦と同じである。

\*

これらの文字瓦はどれも焼成前に書かれたものだから、瓦の製作場で書かれたのは確かである。それでは、これらの文字が書かれたのは造瓦工程のなかのどの段階であろうか。瓦素地がすっかり乾燥しきっていないかぎり、どの段階でもこのように文字を書くことはできる。しかし造瓦工程の主要な作業である成形・調整という行為で書いた文字がかき消されてしまえば、その痕跡すら残らないのが普通である。当然文字を書きこんだ人間もそうしたシステムは知っていたはずである。

文字瓦Ⅰは桶巻作りの平瓦の凹面に文字を書いているので、平瓦円筒を分割して一枚の平瓦となったときに書いたと考えるのが自然であろう。とすると窯詰めする前の、造瓦工程のなかでは最終的な段階に近いときに書いたことになる。この前には瓦素地を乾燥させる時間があるので、その間しばらく人間の手を離れてしまう。そのために成形・調整を行なった工人が文字を書いたと確定するのはむづかしい。それに対して文字瓦2では、成形・調整した工人自身が文字を書き入れた可能性が強い。それを少し多賀城の文字瓦の例からみてみよう(註5)。

多賀城第Ⅰ・Ⅱ期を通して、丸瓦では凸面の玉

縁部かそれに近い部分に、狭端部を上にした文字を入れる。Ⅰ期の桶巻作りの平瓦でも大体同じようにへら書きする。ところがⅡ期一枚作りの平瓦では、凹面に広端部を上にした刻印となる。Ⅰ期の桶巻作りのものにもいくつかそうした例がある。これは文字の位置や向きが造瓦技術と密接にからみあっていることを示しているといえる。原則として瓦素地を一たん型からはずすと、文字は凹面に入れるという規則性があるようだ。平城宮でもこうした傾向が確認されている(註6)。それは造瓦組織内の規制ではなく、その位置や向きが自然に手のいくところだったからであろう。成形台に粘土板をまいてある状態なら、狭端部を上にした文字が高い確率であられるのは当然である。これらのことから文字瓦2は、粘土板に素地を巻いてある状態のとき、それを作っている工人が書きつけたと考えるべきである。これについては造瓦器具や工人の作業姿勢もふくめて今後も注意していきたいと思っている。

\*

ここでは3点の文字瓦が貢納体系を示すものではないという想定から、資料を紹介してみた。文字に対する解釈はこれ以外にもあると思う。御教示願えれば幸いである。

(2班・千原台事務所)

#### 註

- 1) 沼沢豊『成東町真行寺廃寺跡確認調査報告』昭57
- 2) 昭和57年12月に、金堂の南及び東の地域の確認調査を、今泉潔・岸本雅人が担当して行った。
- 3) 右側の部分は上野国分寺出土の「□月足」の「足」の字体によく似ている。相川龍雄編『上野国分寺文字瓦譜』昭9 No.52
- 4) 台渡廃寺跡の「徳輪寺」、新治廃寺の「大寺」文字瓦の「寺」は通常の筆順である。また筆順のわかる墨書土器でもやはりそうである。
- 5) 高野芳宏他「多賀城の文字瓦(その1)」『研究紀要』Ⅲ 昭51、高野芳宏他「多賀城第Ⅱ期の刻印文字瓦」『研究紀要』Ⅴ 昭53
- 6) 森郁夫「平城宮の文字瓦」『研究論集』Ⅵ 昭55